

平取町 2025 年度公開研究会「沙流川の水、森そして空：二風谷の歴史文化景観の再発見」
平取町の天体に関する伝承から日本列島の星文化を考える

北尾浩一 Kouichi Kitao
(星の伝承研究室)

1. はじめに

川に水が流れ、空そして森を映し出す。森の木々は、空に向かって成長していく。空は、明るさ、色を変え、やがて星空となる。

星空は、人びとの暮らしにとって、どのような意味を持ってきたのであろうか。人びとは、どの程度、星を見てきたのであろうか。平取町（びらとりちょう）二風谷（にぶたに）の星名伝承、日高地方の星名伝承（沙流川流域むかわ町を含む）から、日本列島東北地方、九州、沖縄・奄美の星文化の多様性を考えたい。

2. 北斗七星（おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ ）—平取町から日本列島の星名伝承

(1) 平取町二風谷で語られたトイタサオツ、ピサクノカ

『萱野茂のアイヌ語辞典』『やさしいアイヌ語(2)』（萱野 2002）（萱野 1990）に次のように記されている。

表1 二風谷で語られた北斗七星（おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ ）

萱野茂のアイヌ語辞典	やさしいアイヌ語 (1) (2) (講師 萱野茂) ※
トイタサオツ	トイタ：畑を耕す サオツ：逃げる 「トイタサオツ」（北斗七星）は、畑をする時期になると高いところに上がっています。畑の時期でない時は、いだけ**低くなります。ですから、畑の時期になると逃げてしまう星、と呼んでいるのです。私は、一週間ぐらい前、「トイタサオツ」ほどの辺だろうかと思ってってみました。すると、かなり上のほうに上がっていました。本当に、畑の時には逃げるんだなあ、と思いました。
ピサクノカ	ピサクノカ

※2024年10月萱野志朗氏より説明いただく ※※ものすごく

(2) 平取町二風谷と新ひだか町静内との比較

トイタサオツ（トイタサヲツ）は畑仕事から逃げるという意味である。星空での逃げ方は、表2のように異なる。

表2 二風谷で北斗七星、静内ではプレアデス星団を意味する

	平取町二風谷	新ひだか町静内
星名	トイタサオツ	トイタサヲツ
意味する星	北斗七星（おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ ）	プレアデス星団
星空での逃げ方	畑をする時期になると高度をあげ、空高くあがって逃げる。	畑をする時期になると逃げて見えなくなってしまう、畑仕事が終わる秋に見えるようになる。（日没後）

(3) 北斗七星（おおぐま座 $\alpha\beta\gamma\delta\epsilon\zeta\eta$ ）の見え方

- ・日本は、南北に長い。もっとも北の北海道宗谷岬は、北緯45度31分22秒、有人島でもっとも南の沖縄県波照間島では北緯24度2分44秒。北極星（こぐま座 α 星）の高度は20度以上も異なり、最北端の高度は、最南端の倍近くになる。
- ・北海道では、北斗七星が周極星になる一方で、沖縄では北斗七星のすべての星が周極星とならずに地平線下に没する。
- ・北斗七星の見え方の特徴が伝承の形成に影響した。

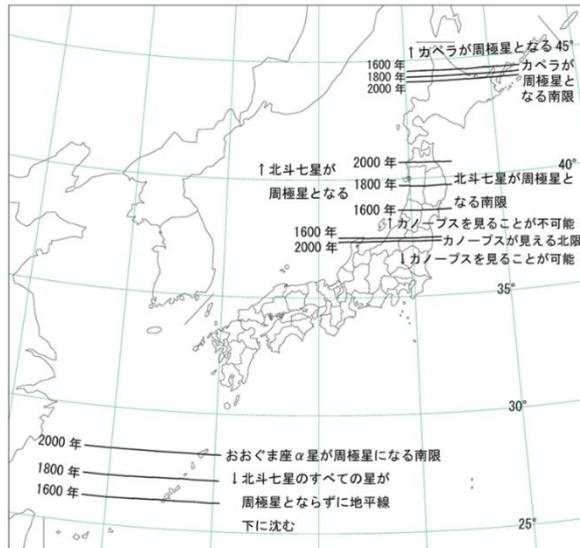


図1 星の見え方の変化（日本列島）

(4) 共通した星名形成「柄杓」「船」

おおぐま座 $\alpha\beta\gamma\delta\epsilon\zeta\eta$ （北斗七星）について、日本列島では、「柄杓」という共通した星名が形成された。（表3）

表3 日本列島の共通した星名形成（柄杓）

	アイヌ	大和	沖縄・奄美
柄杓	平取町 ピサクノカ pisakku noka (萱野 2002)	鹿児島県出水市住吉町、 宮城県気仙沼市大島 ヒシヤクボシ（北尾C）	沖縄県糸満市ニューブシ （北尾C）、八重山郡竹富町 鳩間島フダルブシ（北尾AC）

おおぐま座 $\gamma\delta\epsilon\zeta\eta$ について、日本列島では「船」という共通した星名が形成された。（表4）

表4 日本列島の共通した星名形成（船）

	アイヌ	大和	沖縄・奄美
船	アイヌモシリ南部海岸 チフ・ノチウ（舟・星） チフノカノチウ （舟・の形をした・星） (末岡 2009)	島根県鹿足郡畑の大庭良 美氏フナボシ（野尻 1973）	沖縄県宮古郡上野村宇宮 國（現 宮古島市） フニブス：漁船や航海中、船員たち が見当にすると云うことから船星 と伝えられている（北尾AC）

(5) 特徴ある星名形成（アイヌ）

おおぐま座 $\alpha\beta\gamma\delta\epsilon\zeta\eta$ （北斗七星）の全ての星が沈まない星空景観であることが星名形成に影響した。

- クットコノカ・ノチウ 上向きに寝た「カムイ」の姿をしている・星 北の地平線近くに上向きに寝た姿
- ウナンノカ・ノチウ 下向きに寝た「カムイ」の姿をしている・星 空高く下向きに寝た姿（末岡 2009）

(6) 特徴ある星名形成 (大和)

①構成する星の数にもとづいて形成された「ナナツボシ (七つ星)」が広く分布している。

②榦、酒榦に見立てた星名は、オリオン三つ星と小三つ星と η 星に多いが、北斗七星 (おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$) を意味するケースがある。

③タノクサボシ (田の草星) 本田実氏による。広島県沼隈郡に伝えられている。田の草を取る乙女の列に見立てた。(野尻 1973)

④カジボシ (舵星) ⑤キタノオオカジ (北の大舵) 金田伊三吉氏が石川県珠洲市で昭和 16 年当時 85・86 歳の人から記録した。いて座の南斗六星 (ミナミノコカジ) と違い、大きく、また、北のほうに輝くことからキタノオオカジという星名が形成された。

⑥チソー (四三)、チソボシ (四三星)

1983 年、愛媛県西条市西之川 (石鎚山) において記録。

「スマル、カセボシは入 (い) るくがあるが、私はチソボシ入るくない」(北尾 C)

スマル (プレアデス星団) とカセボシ (オリオン座三つ星) が西の空へ低くなっていくとチソボシ (北斗七星) が高くなっていく。スマル (プレアデス星団) とカセボシ (オリオン座) は西の山々へと入っていくが、チソボシは入ることができない…と歌った。

厳密には、現在、愛媛県西条市石鎚山からは北斗七星即ち、おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ が全て沈むわけではない。 η 星と γ 星は沈む。時代をさかのぼり、西暦 700 年頃以前には $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$ 全てが入るくないこと即ち周極星になる。しかし、実際は η 星と γ 星が沈んでも「チソボシ入るくない」と伝承される星空景観と考えることも可能ではなからうか。

(7) 特徴ある星名形成 (沖縄・奄美)

①構成する星の数にもとづいて形成された星名が最も多い。ナナツボシ、ナナチブシ (七つ星)

粟国島浜の末吉とよさん (大正 15 年生まれ) 「ナナチブシ、女 4 名、男 3 名、仲がよかったらしい。ごはんでも 7 人でわけて」

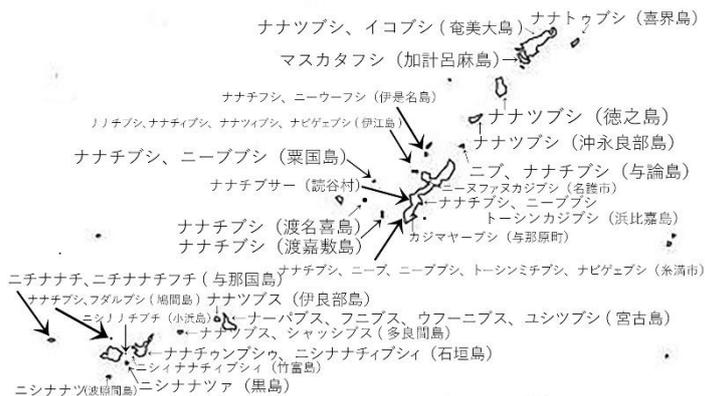


図2 沖縄・奄美の北斗七星 (おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$)

②構成する星の数に方角を加えた星名が八重山地方に広く形成された。

ニシナナチブシイ (北七つ星)。八重山では、おおぐま座の α 星、 β 星、 γ 星、 δ 星、 ϵ 星、 ζ 星、 η 星が全て地平線下に沈んでしまうことにより伝承形成された。(表 5) (喜舎場 1970a)

表5 ムリ星ユンタ（ニシ七つ星）（『八重山古謡（上）』より引用）（喜舎場 1970a）

原 歌	訳
ニシ七 ^{ナナチブシ} 星 ^シ ドウヨウ	北斗七星の星座は
天 ^{テイ} ヌアージ ^{マイ} 前カラ	天帝の大前から
島 ^{シイマ} ウタイデユチャラ	島を指揮せと仰せられた
国 ^{クニ} ウタイデユチャラ	国を治めよと命ぜられたが
バンヤ島ウタールヌ	私の微力では島の指揮は出来ませぬ
クリヤ ^{クニ} 国ウタールヌ	この星座では国の指図は不可能だと答えたら
ンバデイズユヤンドウ	不承知であったために
ユムデイズチニヤンドウ	否といったので
北 ^{キタ} ヌ方 ^{ホウ} ニフンウトウシ	北方に踏み落とされた
丑 ^{ウシ} ぬ方 ^{ホウ} ニウッチエンドウ	丑の方角に打遣られた
巻 ^{マキ} 踊 ^{イブドゥリイ} シウンサ	巻踊をしておるであろう
ユイ踊 ^イ りシウンサ	結い踊りをしておるようだ

ニシナナチブシに続けて、南七星（パイナナチブシ）が沈み、ムリカ星（プレアデス星団）が島の真上を運行すると歌は続く。日の入り後、北七つ星が沈んでいき、続いて南七星（パイナナチブシ）（南斗六星）が沈み、明け方、ムリカ星（プレアデス星団）が南中してほぼ頭の上を通るという条件を満たした期間に歌の通りの星の見え方となる。

明け方太陽高度-13度の時間にプレアデス星団が南中しているという条件を考えると9月4日以降（1900年、石垣島の場合）となる。また、日の入り後太陽高度-13度において北七つ星がまだ沈んでいないとき（丑の方向におおぐま座β星が高度約8度であるときと仮定）という条件を考えると、9月15日までとなる。（1900年、石垣島の場合）したがって、歌の通りに見えるのは、1年のなかで9月4日～15日頃までの短い期間となる。

そして、この星空景観は、沖縄のみで可能な景観であり、沖縄での伝承形成となった。

3. オリオン座三つ星—平取町の星名伝承

オリオン座三つ星に、日々の暮らしの道具「杵」（きね）を描いたイユタニノチュー、星の数3にもとづくレヌシペという星名が伝えられている。（萱野 1990）（萱野 2002）

表6 平取町二風谷の星名—オリオン座三つ星

	萱野茂のアイヌ語辞典	やさしいアイヌ語（2）（講師 萱野茂）※
オリオン座 三つ星	イユタニノチュー iyutani-nociw イユタニ=杵（きね） ノチュー=星 三つ星:オリオン座中央部の連星	イユタニノチュー 「イユタニ」（杵）を握ると上と下のほうに搗（つ）くところがあります。ですから、三星（みつぼし）のことを片手で持つ杵のような星ということで、「イユタニノチュー」といいます。
オリオン座 三つ星	レヌシペ ren-us-pe	星が三つ並んで見える三星（みつぼし）（唐鋤星）があります。十一時十二時の夜中になって西南の方向に見えます。三星は「レヌシペ」といいます。「レヌシペ」は三つあるもの、という意味です。「レヌシペ」は「レン」と「ウシペ」が繋がってきた言葉です。レン：3人

※2024年10月萱野志朗氏より説明いただいた

『アイヌ語沙流方言辞典』には、renuspe レヌシペ (ren-us-pe、三人・くっついている・もの) と記されている。イユタニは、オリオン座三つ星ではなく、わし座アルタイルと $\beta\gamma$ を意味する。(田村1996) 前述のトイタサオツ(トイタサヲツ)と同様、同じ名前が異なる星を意味するケースである。

4. 日本列島の星名比較 (ベガと $\epsilon\zeta$ 、わし座アルタイルと $\beta\gamma$)

(1) 日高町福満(ふくみつ)出身の平賀(ひらが)サダさん(1895頃-1972年)の伝えていた星名伝承。

ベガと ϵ 、 ζ を熊の鼻と二つの眼に見立ててマラットサパと名付けた。イユタニは、本ケースではオリオン座三つ星ではなく、わし座アルタイルと $\beta\gamma$ を意味する。

表7 こと座ベガと ϵ 、 ζ の三角形に熊を描く(比較)

	星名	解説
福満(ふくみつ)出身の平賀サダさん、(1895頃-1972年)(田村1996)	Marattosapa マラットサパ	星座名。天の川の西側にある男の星座。三つの星がちょうど熊の頭の二つの目(ϵ 、 ζ)と鼻(ベガ)のように三角形に並んでいる。東側にある i y u t a n i イユタニはこれの妻。
末岡外美夫 『アイヌの星』	marattonokanociw マラットノカノチウ marattonoka マラットノカ	こと座ベガ:マラット(マラットは「熊の死体の頭部」)、 ϵ 、 ζ :二又の枝の先につけたイナウ
末岡外美夫『人間達のみた星座と伝承』	マラットノカ・ノチウ marattonoka・nociw マラットノカ marattonoka	ベガ:マラット ϵ 、 ζ :枝につけたイナウ マラットノカノチウが明け方の暁の北東の地平に姿を現すのは、十二月の中頃からである。マラットノカノチウ(この場合ベガ一星を指す)が見えると獵運を祈願して盛大なイオマンテを行なう。前年のイオマンテで天に昇ったマラットが暁天にその姿を現し・・・

Iyutani (イユタニ、わし座アルタイルと $\beta\gamma$) (天の川の東側にある女の星座) について、平賀サダ氏は、次のように伝えている。

「三つまっすぐに並んで杵(きね)のようだから。西側にある marattosapa マラットサパ はこれの夫。夫婦の神で、いつも女が夫を追っていく。旧暦の七月のお盆にだけ会える。雨が降ると水がふえて川を渡れない。女というものはこのように夫に根(こん)よく従わなければならないと言う」

この二つの星座(北尾注 マラットサパ とイユタニ) がたなばたの東側の女と西側の男だとサダモさんは説明している。伝承が七夕の影響を受けている。

(2) 九州地方の犬飼星

ベガと ϵ 、 ζ を熊ではなく、アルタイルと $\beta\gamma$ を犬を連れた人に見立てた。

平安時代中期の辞書である源順著『倭名類聚抄 天部第一』に、「牽牛 和名比古保之又以奴加比保之」とある。

いまは、九州で犬飼星を記録することができる。

北尾は、福岡県糸島市加布里にて、芥屋(げや)村(現、糸島市)出身の話者からインカイサンを記録。

「タナバタサン、天の川はさんで、イヌカイサン。インカイサン」

「タナバタサン、三つ三角形なってる。もうひとつ、インカイサンは、一列に並んでる。天の川はさんでる」

インカイサンは犬飼いさん。牽牛即ちわし座のアルタイルと一列に並んでいるβ星、γ星のこと。

(3) 沖縄本島の犬伴星と宮古島のウスウマサダティブス(牛馬サダティ星)

沖縄本島の浜比嘉に、インソーヤーブシ(犬伴星)が伝えられている。(金城1984)

宮古島では、ウスウマサダティブス(牛馬サダティ星)が伝えられている。牛と馬を連れて(サダティ)いる星。サダティとは「連れる」という意味。(北尾AC)

(4) 日本列島の星名比較(ベガとεζ、わし座アルタイルとβγ)

ベガとεζ、わし座アルタイルとβγについて、日本列島の星名比較を行なった。

表8 日本列島の星名比較—ベガとεζ、わし座アルタイルとβγ

	ベガとεζ	わし座アルタイルとβγ
アイヌ	マラットサバ 夫 熊 マラットノカノチウ マラットノカ	イユタニ 妻
大和	タナバタサン 女	犬飼星、インカイサン 男 犬
沖縄・奄美	チュラアングワープシ(美女星) (金城1984) ウヤキブシウ(宮城2003)	沖縄本島浜比嘉 インソーヤーブシ(犬伴星) 犬 宮古島 ウスウマサダティブス(牛馬サダティ星) 牛、馬

(5) 日本列島の二星伝承

織女と牽牛は、中国から伝わったものであるが、もともと日本列島に生きる人びとは、こと座ベガ、わし座アルタイルの景観に独自のものを感じていたのではないだろうか。ときには、ベガ、アルタイル以外の景観に七夕と通ずるものを感じていたのではないだろうか。それらの星空景観への感性を仮に「日本列島の二星伝承」と称して表にした。(表9)

表9 日本列島の二星伝承

	ベガとεζ	アルタイルとβγ	北斗七星(おおぐま座αβγδεζη)	添え星アルコル	プレアデス星団の長女ンミブスハーニ
アイヌ日高町福満	マラットサバ夫	イユタニ 妻			
大和(熊本天草島)※	タナバタ様 女	インカイ様男			
沖縄	奄美大島		ナナツボシ女(妹)	スブシ男(兄)	
奄美	伊良部島 前里添※※				ンミブスハーニ

※天草島民俗誌より ※※東アジア民話データベース(ンミブスの長女、ンミブスハーニは地上に降りて水浴びをしている時、メタル主ぬ前に飛び衣を盗まれ、彼の妻になる。ある日子供が「かあちゃんぬ羽衣やメタル主ぬ前がうつばらぬ ひつぬ中んどう 我ちゃ見やい」と歌ったので飛び衣を見つけて一人で天に昇っていった。) 話者池間ヤマ氏

5. プレアデス星団を歌う

星を語るとともに、星を歌った。仕事歌として、神歌として…

(1) 北海道新ひだか町静内の事例

葛野辰次郎氏によると、「トイタ サラッ」の唄を歌いながら畑を耕した。子どもも聞いて、畑を耕し、働いて、食べることができると知った。(葛野 1983) 「シサム方供養星(ママ)と申す」と記しているが、和人は供養星(九曜星)と呼んでいたという意味である。

表10 プレアデス星団が歌われた唄

伝承地	話者	歌詞(葛野辰次郎氏のノート、1979年4月23日)	歌われた星	備考
北海道日高郡新ひだか町静内東別	葛野辰次郎氏	トイタ アンロウ、 トイタ アンロウ 畠 たがやそう、 畠 たがやそう トイタ アンキヤクン テッ トイ ウスネ 畠 たがやしますなら 手に 土 付くわ テッ トイ ウス キヤクン ヤシケ アンキネ 手に 土 つく ならば 洗面 致しましょう ヤシケ アンキ ヤクン モウム アンキ ネ 洗面 致します なら 流れ 致します よ モウム アンキ ヤクン ベウツ チャ ウス キナ アイベカネ 流れ ます なら 川岸に生る草に すがりましょう ベウツ チャ ウス、 キナ、 川 岸に 生える 草に アイベカ キヤクン テッ ツエ ワ すがります なら 手 切れる わ テウツ ツエ キヤクン アンシナキワ 手 切れ ますなら ほうだいしましょう アンシナ キヤクン タシロ コル キワ アタウケ ワ ほうだい 致すなら 山刀 もっ て 切ったぎる わ	トイタ サラッ：プレアデス星団	といたさを、の歌をうた いながら、畑たがやし 子 どもにも聞かし働き者は食 べうると申しながらとの事 です。此のトイタサラッは 畑たがやし稔となる間、出 ない星です。それでフチ達 が(トイタサラッ)と星に名 付、其の星シサム方供養星 (九曜星)と申す

(2) 愛媛県越智郡魚島村魚島(現 上島町)

瀬戸内海という夜間でも静かな海があるということが、豊かな星名伝承を形成した。愛媛県魚島、山口県野島で海の海老と空のプレアデス星団を対比して歌った唄を記録できた。

1984年2月に出会った愛媛県越智郡魚島村魚島の藤本藤枝さん(明治39年生まれ)は、櫓を漕ぐときの歌を伝えていた。

「天がせまいかよー、スマルボシはなーらぶよ、海がせまいか、エビかごむーよー」

空は広いのに無理にスマルボシ(プレアデス星団)はひとところにごじゃごじゃとかたまってならばなくてもよいのに、海は広いのに海老は体を小さく曲げなくてもよいのに一という意味である。

人びとは、広大な星空と海との間で、ひとつひとつの星と海の生き物に接してきた。そして、自分の目で観察して感じた疑問—広大な星空にスマルボシはひとところにならばずに均等に分布すればよいのに—ということ、広大な海に小さく体を曲げている海老とともに歌った。

(3) 沖縄県宮古郡多良間村

一晩の星の出を歌った与那覇勢頭豊見親のにーりは、仕事歌であり、神歌であった。(北尾

2024) ニーリの解釈(表1 1)については、庶民史、史歌集解、村誌、村史、歌謡大成、下地和宏氏著「与那覇勢頭豊見親について」を参考にして作成した。(稲村 1957) (稲村 1962) (多良間村誌編纂委員会 1973)、(多良間村史編集委員会 1989) (外間他 1978) (下地 2008)

表 1 1 与那覇勢頭豊見親のにーりー一晚の星の出

歌『宮古島旧話並史歌集解』より引用)	解釈
47 寅(とら)の方(ぼ)ゆ見いりば あがるなゆ、見いりば、	47 寅の方向を見たら、星のあがるのを見たら
48 ゆしやすみやーや、 きんたてい、うりがあとからや、	48 秋の四辺形の四隅に柱を立てて家建て、そのあとからは
49 んみ星(ぶす)ばあがらし うりがあとからや	49 んミプス(プレアデス星団)が上がり、そのあとからは
50 むい星(ぶす)ばあがらし うりがあとからや	50 ムイプス(アルデバランとヒアデス星団で構成するV字形)が上がり、そのあとからは
51 た一きゆみや上らし うりがあとからや	51 タタキョ(オリオン座三つ星)が上がり、そのあとからは
52 うぶらくーら、あ がらし、うりがあとからや	52 ウブラ(シリウス)クーラ(プロキオン)が上がりそのあとからは
53 うぶてだゆ上らし	53 太陽が上がり、お日様が上がり
54 にいらてだ、うかぎん、 あらうてだみうぶきん	54 にいら島の支配者(てだ、太陽)の御陰様で あらう島の支配者(てだ、太陽)の御助けで
55 島たていばならいゆ ふん立ていばならいゆ、	55 宮古島を立派に立て直した(島たてい、ふん立)ことを(後世の人は)見習え

6. おわりに

末岡外美夫氏は、「人間達(アイヌタリ)のみた星座と伝承」で、宮古島狩俣の祖神(うやがむ)のにーりを引用している。(末岡 2009)

「天のあかぶしややよ 天の明星(金星)よ
てだなうわ 真主(まぬす)よ 太陽の子 真主よ
ドントナギ、マサリヤガ (囃子ことば)」
「でだのぶーず 豊見親よ 太陽の大按司 豊見親(とよみや)よ
上なうわ 真主よ 天上の子 真主よ
ドントナギ、マサリヤガ (囃子ことば)」

末岡外美夫氏は、アイヌ文化と宮古島の祖神のにーりに通ずるものがあると指摘している。

(1) 円陣を組んで拍子をとる、神々の系譜とそのその歴史をほめたたえる「祖神にしり」(ママ) (祖神(うやがむ)のにーり)は、アイヌの歌謡を思い出させる。

(2) 旧暦の九月から一二月までの間に行われる冬ウプナーの内容に、アイヌの祖先祭イチャルパと通じるものがある。

(3) この地の太陽と金星の関わりは、アイヌモンシの口碑に近い。

(4) 2500キロも離れている北と南の島の民の間に、似た星の見方と風習があるのも天のなせる技であろうか。

アイヌと沖縄との連続性について、末岡外美夫氏の宮古島の祖神のにーりについての指摘があった。まだまだ調査研究の途上であるが、アイヌ、大和、沖縄・奄美の星名には、次のように共通しているものとそうでないものがある。

(1) 注目する星列

- ・共通のもの…明けの明星、宵の明星、北斗七星、オリオン座三つ星、プレアデス星団、こと座ベガ、わし座アルタイルと $\beta\gamma$
- ・共通でないもの…うお座 α とくじら座上半身オパリケプカムイ（台風のカムイ）等

(2) 星名形成、伝承形成

- ・共通の認知による星名形成・・・柄杓、船（アイヌ、大和、沖縄・奄美）
- ・地域により多様性・・・周極星であることからの伝承形成（アイヌ）／北斗七星全ての星が沈むことによる伝承形成（沖縄・奄美）

謝辞

2009年3月にはじめて二風谷を訪ねて以来、萱野志朗氏、アシリレラ氏より多くの伝承を学ぶことができた。また、新ひだか町静内の葛野次雄氏より葛野辰次郎氏の伝えていた星名伝承を教えていただくことができた。紙面を借りてお礼を申し上げます。

そして、アイヌの人びとの暮らしのなかで語られ、沙流川のドジョウが登場したお月さんに連れて行かれた少年の話に二風谷で出会えたことに感謝をいたします。星、月を見て感じること、そして、ことば、物語、歌に表現することの多様性をたいせつにしたいと思います。（北尾 2025a）（北尾 2025b）

※

※

- ◆「からっぽやみ（トランネ[怠け者]）の少年」（2024年10月、萱野志朗氏（萱野茂二風谷アイヌ資料館館長）より聞いた話
ある少年が、水汲みに母親から言いつけられて、行くわけです。そして、いちばんはじめにイヌンペと言って、いろりのまわりにある炉縁（ろぶち）です。炉縁を水汲みに行く柄杓でたたいて、イヌンペはそこでねっこらがついているだけでいいなあ。次は柱イクシペをぼんぼんとたたいて、この柱はただ立ってるだけでいいなあ。
次に、どじょう、どじょうのことを「チチラ」というのですけれども、どじょうを見てその口のほそいものと悪口いった。次にマスに会う。マスのことをサキベというのですよ。夏に食べるものという意味。マスは、身がやわらかいのです。その身のやわらかいマスみたいなの、と悪口を言う。
次にサケに会う。サケともいいですけど、北海道ではだいたいシャケ。シャケ（サケ）に会ったら、サケはアイヌ語ではカムイチェブ。カムイチェブに向かってああ神の魚よとよびかけて、で、そのあと、どういうわけか月に連れていかれて。誰が連れて行ったか。
母親が息子を探しにに行く。誰に聞いても教えてくれない。どじょうにきいても、教えてくれない。マスに聞いても身のやわらかいやつと悪口言ったから教えてくれない。ほんとうはやわらかくておいしいのですけれど。
鮭はカムイチェブと言われたから教えてくれる。悪態ついて、怠け者だから月に連れて行かれたんだ。怠け者の少年は今まで天秤棒がついで月にいるんだよという話。実際に民話でそういう話したのです。

- ◆月に連れて行かれた子ども（2009年3月、アシリレラ氏から聞いた話。（平賀ヤオキ氏（富川）、アシリレラ氏の母「山道サキ氏」（明治44年生まれ、山の向こうの「むかむ町」出身）から聞いた話
あるとき、いろりのそばの子どもにおばあさんが言いました。
「水汲みを手伝ってくれ」
子どもはめんどくさがり、いうことをききません。
「ばあちゃんが薪（まき）を取って帰るまでに、水を汲んできなさい」
そう言って、おばあさんは薪を取りに行きました。子どもは、イヌンペ（炉縁、いろりのフチ）をたたいて言いました。
「おまえ（イヌンペ）はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」
そして、足元の祭壇を立ったままあげりして、水くみに行こうとしなかったのです。
クンネばあちゃん（クンネノチウ、シネブノチウ、一番星）の出る頃、子どもは、水おけを持って、「いろりの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。それから、「水を汲まない」と、桶（おけ）をふり、ピサック（柄杓）を持って、川に降りて行きました。しかし、子どもは、水を汲むのが嫌で川で遊んでいました。

おばあさんが家に帰ると、その小僧（子ども）がいまません。おばあさんは、きつと水汲みに真面目に行ったのだろうと、川を降りていきました。ところが、子どもはいません。桶が1つ置いてありました。

おばあさんは、川の魚に、「アメマスさん、私の子どもを知りませんか」と尋ねます。すると、アメマスは、「あの癒け者は、（アメマスのことを）斑点だらけの悪いやつというので教えない」と、教えてくれません。

困ったおばあさんは、「どじょうさん、どこに行ったか」と尋ねると、「川のつるんつるんで変な奴と言ったので教えない」と教えてくれません。

おばあさんは、海の近くまで歩いて、へとへとです。

「癒け者の子どもは、どこに行った。早く帰って！」

海の近くに行くと、サケがあがってきました。

「カムイチェブ（神の魚、サケ）さん、あなたは私の子どもを知ってるのではないかい」

おばあさんが、サケにそう尋ねますと、カムイチェブ（サケ）は、「ぼくのことをカムイチェブ（神の魚）と、子どもが言ったので教えてあげるよ。空を見てごらん。あれ、お月さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行った。桶（おけ）を持った小僧が立ってるんだよ」

それからというもの、癒けてる子どもに、「お月さんが怒（おこ）って、あのなかに持っていくよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。

※ ※

引用文献

- 吉田 1911…吉田巖「星に関するアイヌの傳説」『人類学雑誌第二十七卷第七號』東京人類學會、1911、pp. 396 - 401。
浜田 1932…浜田隆一『天草島民俗誌』郷土研究社、1932、pp. 35 - 38。
稲村 1957…稲村賢敷『宮古島庶民史』、1957、pp. 211 - 231。
稲村 1962…稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、pp. 393-401。
喜舎場 1970a…喜舎場永珣『八重山古謡 上巻』沖縄タイムス社、1970、pp. 43-48。
多良間村誌編纂委員会 1973…多良間村誌編纂委員会『村誌 たらま島』、1973、pp. 433-440。
野尻 1973…野尻抱影『日本星名辞典』東京堂出版 1973、pp. 12-13。 p. 107。
外間他 1978…外間守善、新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ宮古島』角川書店、1978、pp. 163-165。
末岡 1979…末岡外美夫『アイヌの星』旭川振興公社、1979、pp. 187 - 192。
葛野 1983…葛野辰次郎『神の語り神互いに話しあう』オホーツク文化資料館、1983、pp. 5-7。 pp. 10-12。
金城 1984…金城誠「浜・比嘉で拾った星の方言名」『やちむん第8号』やちむん会、1984、pp. 62-69。
多良間村史編集委員会 1989…多良間村史編集委員会『多良間村史 第五巻資料編4（芸能）』、pp. 492-499。
萱野 1989…萱野茂『やさしいアイヌ語(1)（昭和62年度講義録）』平取町二風谷アイヌ語教室、1989、p. 54。
萱野 1990…萱野茂『やさしいアイヌ語(2)（昭和63年度講義録）』平取町二風谷アイヌ語教室、1990、pp. 44 - 45。
田村 1996…田村すず子『アイヌ語少流方言辞典』草風館、1996、p. 266。 p. 378。 p. 573。
萱野 2002…萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』三省堂、2002、p. 76。 p. 326。 pp. 383 - 384。 p. 476。
宮城 2003…宮城信男『石垣方言辞典 本文編』沖縄タイムス社、2003、p170。
下地 2008…下地和宏「与那覇勢頭豊見親について」『宮古島市総合博物館紀要』第12号、2008、pp. 11-26
末岡 2009…末岡外美夫『人間達(アイヌ)のみた星座と伝承』2009、pp. 111 - 117。 pp. 196 - 198。 pp. 208 - 209。 pp. 363 - 370。
北尾 2024…北尾浩一「天文文化から与那覇勢頭豊見親のにーりを考える」松浦清・真貝寿明編『天文文化の視点 - 星を軸に文化を語る』(勉誠社、2024年) pp. 1-27
北尾 2025a…北尾浩一「アイヌのプレアデス星団についての伝承～その多様性を考える～」『天文教育 2025年5月』日本天文教育普及研究会、pp. 55-61。
北尾 2025b…北尾浩一「アイヌの月についての伝承～その多様性を考える～」『天文教育 2025年7月』日本天文教育普及研究会、pp. 94-101。
北尾 C・・・北尾による現地調査
北尾 AC・・・北尾によるアンケート調査